

20-86

3780

35

訂增  
軍歌集

072979-000-6

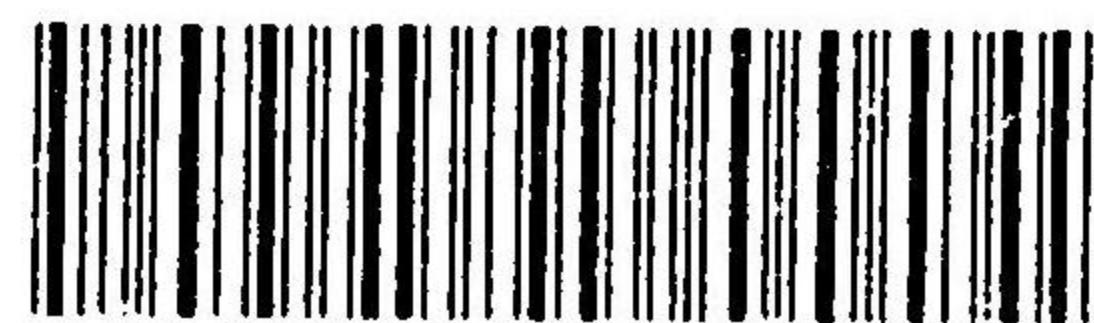
特62-410

軍歌集 (增訂)

岩田与七

M24

CEH-0517





特 62  
410

訂增  
軍  
歌  
集

目  
次

◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
拔	君	同	同	同	同	同	同	日	外	
刀	が							本	交	
隊	代							魂	の	
第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	
一	七	六	五	四	三	二	一			

.....

.....

.....

.....

.....

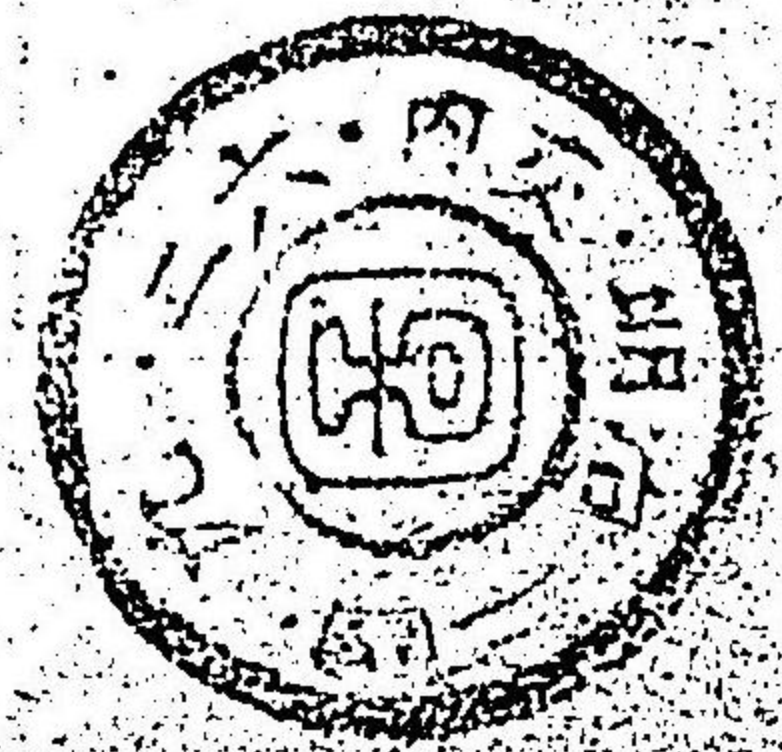
.....

.....

.....

同九同八同七同六同五

丁丁丁丁丁丁丁丁









◎僧月照……………四十二丁

◎西郷隆盛……………四十五丁

◎花月の歌……………四十八丁

軍歌集



◎外交の歌

西に英吉利北に魯西亞  
 外表に結ぶ條約も  
 萬國公法ありとても  
 強弱肉を争ふは  
 嗚呼同胞の兄弟よ  
 盡せやはげめ諸共に

◎日本魂第一

人も斬るべし我身をも  
 二千年來遺傳せる  
 國と君とに身を捧げ

油断な爲せど國の人  
 心の底は測かたれず  
 いざ事あはば腕力の  
 覺悟の前となるを  
 御國に生れし甲斐あはば  
 赤心込めてつくすべし

唯義によりて殺すてふ  
 我が寶なる日本魂  
 皇國を護る大丈夫



見よや見よみよ碧眼奴  
鞘を拂へば玉ぞ散る

日本刀は腰にあり  
切れ味見せんいざ來れ

◎同第二

小 さき國とて侮るな  
骨 肉 共 に 膽 な り と  
忠 義 に 満 る 神 洲 の  
見よや見よみよ碧眼奴  
鞘を拂へば玉ぞ散る

見掛によらぬ中のみ  
人に知ふる、日本魂  
男兒の數は二千萬  
日本刀は腰にあり  
切れ味見せんいざ來れ

◎同第三

國の爲めなり君の爲め  
忘れて知らで一筋に  
前兵僵ふる其の屍

捨つる命の親も子も  
彌やまし勵む日本魂  
飛び越へ進む後騎隊

見よや見よみよ碧眼奴  
鞘を拂へば玉ぞ散る

日本刀は腰にあり  
切れ味見せんいざ來れ

◎同第四

海を蔽へる軍艦は  
死せざる中は何のその  
みがさ上げたる我腕の  
見よや見よみよ碧眼奴  
鞘を拂へば玉ぞ散る

烟をまきて來るとも  
争かて恐れん日本魂  
續かん限り試めしめん  
日本刀は腰にあり  
切れ味見せんいざ來れ

◎同第五

汝聞かずや神后や  
三韓征代竹を破る  
全八道の民草は

下りて豊臣太閤の  
勢はひ猛き日本魂  
其威其武に靡さしを



見よや見よみよ碧眼奴  
鞘を拂へば玉ぞ散る

日本刀の腰にあり  
切れ味見せんいざ來れ

◎同第六

又聞かざるの十萬の  
浪脚分け來る艦艦を  
烈しく吹き出す颯風にて  
見よや見よみよ碧眼奴  
鞘を拂へば玉ぞ散る

元兵我を襲はんと  
見取り取り怒る日本魂  
三人の外は亡せり  
日本刀は腰にあり  
切れ味見せんいざ來れ

◎同第七

サ一こい來れいざ來れ  
ならば手柄に打て見よ  
兵士は如何に強くとも

獅子諸共に驚も來よ  
皇國を護る日本魂  
劍は如何に鋭くも

見よや見よみよ碧眼奴  
鞘を拂へば玉ぞ散る

日本刀の腰にあり  
切れ味見せんいざ來れ

◎君が代

君が代は  
さぐれ石れ  
昔れひすまで

千代お八千代に  
いはほととなりて

◎拔刀隊第一

吾れは官軍我敵は  
敵の大將たる者は  
是れお從ふ兵れは  
鬼神お聡ぬ勇あるも  
起せし者は昔より

天地容れざる朝敵ぞ  
古今無雙れ英雄で  
共に慄悍決死れ士  
天の許さぬ反逆を  
榮へしためし非ざるぞ



敵の亡ぶる夫れ迄は  
玉散る劍抜き連て

◎同第二

皇國の風と武士は  
維新以來廢れたる  
又世に出る身の譽れ  
亦の下に死ぬへきに  
死すべき時は今なるぞ  
敵の亡ぶる夫迄は  
玉散る劍抜き連て

◎同第三

進めや進め諸共  
死する覺悟で進むべし

其身を守る魂の  
日本刀の今更に  
敵も味方も諸共に  
日本魂ある者は  
人に後れて恥かくな  
進めや進め諸共に  
死する覺悟で進むべし

前を望めば劍なり  
劍の山に登るのは  
此世に於て面れあたり  
我身れなせる罪業を  
賊を征伐するが爲め  
敵れ亡ぶる夫迄は  
玉散る劍抜き連て

◎同第四

劍れ光閃くは  
四方に打出す砲聲は  
敵れ亦に伏す者や

右も左も皆劍  
未來れ事と聞きつるに  
劍れ山に登るれも  
滅す爲めに非らずして  
劍れ山も何んれそれ  
進めや進め諸共に  
死する覺悟で進むべし

雲間に見ゆる電の  
天に轟く雷か  
丸に砕けて魂れをれ



絶て果がなく死する身は  
其血は流れて川をなす  
敵の亡ぶる夫迄は  
玉散る劔抜き連れて

◎同第五

彈丸雨飛の間にも  
進む我身は野嵐に  
果かなき最後を遂ぐる共  
死して甲斐ある者なれば  
我ど思はん人達は  
敵の亡ぶる夫迄は

屍は積て山をなし  
死地に入るれも君の爲め  
進めや進め諸共に  
死する覺悟で進むべし

二つ無き身を惜まず  
吹かれて消ゆる白露の  
忠義の爲めに死する身の  
死するも更に恨みなし  
一歩も後へ引なかれ  
進めや進め諸共に

玉散る劔抜き連れて

◎同第六

我れ今此に死なん身は  
捨つべき者は命なり  
忠義の爲めに死する身の  
永く傳へて残るらん  
義もなき犬と言はるくな  
敵の亡ぶる夫迄は  
玉散る劔抜き連れて  
◎兵士の名譽  
春の彌生の朝がすみ

死する覺悟で進むべし

君の爲なり國の爲め  
縦令屍はくつるども  
名は芳しく後の世に  
武士と生れた甲斐もなく  
卑怯者ぞと謗れなく  
進めや進め諸共に  
死する覺悟で進むべし

勾ふ櫻の木の間より



昇る旭は白妙の  
光りのどけき君か代を  
護るつとめは有明の  
雨は臙と故郷の  
身は聯隊に入しより  
戟の枕に夜はなれて  
契りも深き戦友に  
書を繙く冬の窓  
磨く剣と魂ひの  
三手千九百萬人の  
雙手に握る兵の

十四  
ふじの高根に輝きて  
千代に八千代の末までも  
つなきぬ名残を夕暮に  
馴れし家路を打捨て  
早や二とせの旅衣  
秋の憐も白露の  
勵さられつ勵しつ  
戰擬ふ春の野邊  
光は常にかやさて  
名譽財産生命を  
身は日の本の礎と

おもへば輕死我いのち  
遣る憾はあらがねの  
劍の雨もふらばふれ  
◎大丈夫の赤心  
皇御國の大丈夫が  
故郷立出で都なる  
いざ事あらば兼てより  
盡す心は有明の  
赤き心は曇りなく  
隊伍の中に押立て  
喇叭の音に歩調

十五  
千々に碎けて果るとも  
彈丸の霰も降ばふれ  
君が爲とて健氣にも  
四方に灼く金城に  
捧し命惜ず  
月にむら雲ありとも  
晴て旭日の軍旗をば  
勇氣の風に翻し  
揃ひて進むぞ勇敢さ



◎護國の教

◎第一

日の出照り沿ふ皇國の  
鎮め安らぐ兵士は  
同じ磐根に生ひ立て  
今は昔に彌や増して  
世々に傳わる大和魂  
君の恵も深ければ  
時を得顔に咲き初めし  
中に一入色見へて  
是れぞ手柄の魁ぞ

明に治まる大御代を  
陸と海との隔てなく  
末も賑ふ同胞ぞ  
國の御靈と稱へつゝ  
花に譬へば八重櫻  
御階近くも並み沿へて  
樹々の梢は榮ゆらん  
今を盛りの一本は  
音に聞ゆる兵士は

何れ日嵐の仇櫻  
磯邊を亂す事あらば  
銃口揃へていと易く  
浪を分け行く大船に  
なんのくもなく晴々と

清き海原波立て  
彼處此處の砦より  
打て沈めん水底へ  
假へて翼を添ゆるとも  
打て悪魔を攘ふべし

◎第二

仰げば高し富士の山  
俯しては深し日本海  
世界に多き國々に  
我れ日本の本を守るの  
其職帯ぶる兵のが

皓々白く天を衡き  
廣く限りもあらざるぞ  
比較もれも絶てなき  
形ち非ず術でなし  
忠と勇との操を



養ひ磨き諸共に  
不俱戴天の仇となし  
劍の錆と爲しぬべし  
二十餘萬れ蒙古等を  
魚れ餌食と爲しぬるぞ  
海や山路を踏み越へて  
馬蹄に懸けて蹂躪り  
其功績は今迄も  
人と生れし上からは  
彈丸や刃に端向ふて  
尸を曝せ雨嵐し

御稜威を汚すもれあらば  
奮ひ進みて切りまくり  
昔し北條時宗は  
西に海邊に打ち沈め  
豊臣大岡秀吉は  
地理をも知らぬ朝鮮を  
耳もて塚を築きしぞ  
傳へて絶ゆることはなし  
幕れ上に死ぬ勿れ  
屍を包め馬れ革  
曝す尸に添ふ光り

武名を字内に輝かせ

武名を字内に輝かせ

◎策三

我日本は昔しより  
朝鮮や支那までも  
忠と勇とれ績は  
生あるもれ死するれは  
犬と呼ばれて世にあると  
七生期して刺違ふ  
假令此身は朽るとも  
人れ鏡と爲りぬるぞ  
肩れ數とも思はずに

武道をもちて國を立つ  
震ひ恐れし武士れ  
地球れ上に類ひなし  
天れ定むる約束ぞ  
忠義お死すと孰やぞ  
譽も高し湊川  
名は萬代後までも  
敵は百萬ありとて  
倍々起せ我れ士氣



振ふて掛れ敵兵を

◎行軍

我日本は神代御國と稱へきて遠き戎夷が國までも射すや草場は露計り類も少なき緒環れ守るは誰の職務ぞや五の訓誡銘肝して多聚かる人の其中に厚き仁惠は駿河なる

微塵に爲るまで打碎け

故き神代の頃よりも五百海阪隔てたる光輝く旭子の侮り受けし例しだに盡きぬ皇帝の功績を誠實ある身は甘美にも東のあいだも忘るなよ醜の御楯と抜擢れて不二の高峰も尙低き

伊勢の海すら尙淺く寇なす戎夷ありもせば討ち平げて大君の

◎進軍

弾丸は霰と空にとび雷擬ふ砲聲に我魂の緒も打絶ん進むに猛き武士は屍は野邊に曝すと櫻と匂ふ九段坂祭り納にし諸靈は

其皇に若しや又躊躇ふ事はなきものぞ御心慰め奉れ

吹きくる風は腥く今はこの時ぞ勇壯しく躊躇ふ事は何のその名は後の代に覆郁しく空に聳ゆる靖國の是れ大丈夫が龜鑑ぞよ



寇<sup>あせ</sup>なす我<sup>わが</sup>夷<sup>い</sup>盡<sup>つ</sup>るまで  
何<sup>なに</sup>爲<sup>な</sup>す厭<sup>いと</sup>はん敷<sup>し</sup>島の  
堅<sup>かた</sup>に堅<sup>かた</sup>き金<sup>こん</sup>剛<sup>ごう</sup>の  
人<sup>ひと</sup>皆<sup>みな</sup>なへて羨<sup>あやま</sup>慕<sup>ぼ</sup>す  
故<sup>ふる</sup>郷<sup>さと</sup>人<sup>ひと</sup>に品<sup>し</sup>格<sup>かく</sup>高<sup>たか</sup>く  
◎軍<sup>ぐん</sup>歌<sup>か</sup>

假<sup>か</sup>令<sup>じ</sup>や火<sup>ひ</sup>の中<sup>なか</sup>水<sup>みづ</sup>のそこ  
大<sup>おほ</sup>和<sup>わ</sup>魂<sup>たま</sup>飽<sup>あ</sup>くまでも  
石<sup>いし</sup>より光<sup>ひかり</sup>輝<sup>り</sup>灼<sup>や</sup>々<sup>や</sup>は  
青<sup>あお</sup>白<sup>しろ</sup>なせる桐<sup>きり</sup>の章<sup>あや</sup>  
錦<sup>にしき</sup>さを飾<sup>かざ</sup>る心<sup>こころ</sup>氣<sup>き</sup>よさ

◎第一  
來<sup>きた</sup>れや來<sup>きた</sup>れいざ來<sup>きた</sup>れ  
寄<sup>よ</sup>せ來<sup>く</sup>る敵<sup>てき</sup>は多<sup>おほ</sup>くとも

御<sup>み</sup>國<sup>くに</sup>を守<sup>まも</sup>れ諸<sup>もろ</sup>共<sup>とも</sup>に  
恐<sup>おそ</sup>るゝ勿<sup>な</sup>れ恐<sup>おそ</sup>るゝな

◎第二  
進<sup>すす</sup>めや進<sup>すす</sup>めいざ進<sup>すす</sup>め

彈<sup>たま</sup>は霰<sup>あられ</sup>と飛<sup>と</sup>び來<sup>く</sup>るも

劔<sup>つるぎ</sup>は林<sup>はやし</sup>を爲<sup>な</sup>すとて

躊<sup>ためろ</sup>躇<sup>ろ</sup>ことなく進<sup>すす</sup>みゆけ

◎第三  
勇<sup>いさ</sup>めや勇<sup>いさ</sup>め皆<sup>みな</sup>勇<sup>いさ</sup>め  
御<sup>み</sup>國<sup>くに</sup>を守<sup>まも</sup>る兵<sup>へい</sup>士<sup>し</sup>は

劔<sup>つるぎ</sup>も彈<sup>たま</sup>も何<sup>なん</sup>のそ  
身<sup>み</sup>は鐵<sup>てつ</sup>よりも尙<sup>なほ</sup>堅<sup>かた</sup>し

◎第四  
勉<sup>こゝ</sup>めや勉<sup>こゝ</sup>め諸<sup>もろ</sup>共<sup>とも</sup>に  
汚<sup>けが</sup>せし者<sup>もの</sup>ぞど后<sup>のち</sup>の世<sup>よ</sup>に

汚<sup>けが</sup>せし事<sup>こと</sup>なき國<sup>くに</sup>の名<sup>な</sup>を  
言<sup>い</sup>れぬ様<sup>やう</sup>にと覺<sup>かく</sup>悟<sup>ご</sup>して

◎第五  
我<sup>わが</sup>身<sup>み</sup>の失<sup>う</sup>せさる其<sup>その</sup>中<sup>うち</sup>は  
懷<sup>おも</sup>へよ懷<sup>おも</sup>へ能<sup>よ</sup>く懷<sup>おも</sup>へ

神<sup>かみ</sup>より受<sup>う</sup>けたる此<sup>この</sup>國<sup>くに</sup>は  
人<sup>ひと</sup>手<sup>て</sup>に決<sup>けつ</sup>して渡<sup>わた</sup>さずと

◎凱<sup>かい</sup>陣<sup>じん</sup>の祝<sup>いは</sup>ひ



空も長閑に新玉の  
風も静かに祝ひつる  
八氏は川に立騒ぐ  
君は臣等を引連れて  
軍の庭に魁がけて  
實に勇き大丈夫の  
向ふ矢庭に飛來るは  
岩をも碎き黒鐵の  
世になき人になり死と  
皆打守りて歎き居る  
旋會逢瀬のありけるは

春を迎へて秋津島  
程もあらせす武士の  
波のよる晝假なく  
臣は君にも従ひて  
打つ討れつ其中に  
若きははらから二人連  
雨か霰か白瀧の  
丸に當りて兄弟は  
古郷人は傳へ聞き  
折しも事なく歸來て  
ますらたけをの潔よき

廿四

大和心をしろしめす  
功績は世々に遺るらん

◎凱旋

道は六百八十里  
早や二とせを古郷の  
曇り勝ちたる旅の空  
御國の爲と思ひなば  
茲が命の捨てどころ  
負へどもつけぬ赤十字  
敵の運命究りて  
申てぞ還る勝利軍

弓矢は神の恵にて  
功績は代々に遺るらん

長門は浦を艦出して  
山を遙かに眺むれば  
晴さにやならぬ日本の  
露より脆き人の身わ  
身には弾疵の身わ  
猛死味方の勢ひに  
脱さし胃を戟れ尖  
空の曇も今日はれて

廿五



一層高き富士の山  
勳を建し丈夫の

靖國神社

此は都の九壇阪  
人の神魂を祭りてし  
御名を賜ひて建てられし  
拜みまつれば武士の  
みつく戸は山行かば  
我大君れ御爲には  
吹ける嵐に散を族つ

平重盛

峰の白雪消ゆるとも  
名譽は永く竭ざらん

皇國の爲めに死す  
皇城守護の靖國と  
千代八千代まで朽るなく  
斯こそあらめ海行は  
草むすかばね畏くも  
露れ命も仇櫻  
心の内ぞ樂しけれ

皇帝れ御榮を  
蒼生を守れとて  
劍は尖を逆しまに  
父は亂臣覲覲れ賊  
馬を控へて重盛が  
鎧は袖に村時雨  
富士は峰より尙高  
平家の運も今は早や  
引けば一天萬乗れ  
引かねば不孝の罪ぞある  
歩むに難き苦みを

千代に八千代に輝かし  
下し給ひし將軍れ  
刃むけ給ふぞ淺間しき  
心の底に黒鹿毛の  
忠孝苦熱の血の涙だ  
懸るべしとは白雪れ  
君れ恵に榮へたる  
撓むと知れし梓弓  
君に不忠れ恐れあり  
進くも退るも人れ倫  
誰か憐れを夕暮れ



無常れ風れ今しばし  
西の海邊の波の間に  
去りどては又是非もなき  
踏な違へぞ後の人

◎熊谷直實

抑も熊谷直實は  
頼朝公の下臣にて  
知勇兼備の大將と  
左れば元暦元年の  
功名ありし物語り  
曉き侵して熊谷は

小松の枝を拂はねば  
物の憐れは遺さじを  
寸邪許さぬ天道を  
踏な違へぞ後の人

征夷將軍源の  
關東一の旗頭ら  
世にも知れし勇士なり  
源平須磨の戦に  
聞くも中々衰れなり  
敵の陣へと攻め入れば

平家方の武者一騎  
駒を浪間に乗り入れて  
熊谷次郎直實は  
互にしのぎを削りしが  
花も粧ふ薄化粧  
斯るやさしき打拵に  
名乗り給へどありければ  
我れこそ参議経盛の  
早々首を打れよと  
流石に猛き熊谷も  
落る涙は止まらず

沖なる船に後れじと  
一町計り進みしを  
扇を揚げて呼び戻し  
見れば二八の御顔に  
涅槃黒々と附け玉ひ  
君は如何なる御方ぞ  
下よ御聲爽かに  
三男無官の敦盛ぞ  
西に向ひて手を合す  
我子の事まで思やり  
鎧の袖に絞りつと



是非なく太刀を振揚て  
 首は前にと落ちにける  
 須磨の嵐に散にける  
 永く吊ひ申さんと  
 青葉の笛を取添て  
 實に情ある武士の  
 ◎楠正成 其一  
 皇國の武士は  
 其名枯せぬ楠の  
 君に仕へて國のため  
 或は千早に吹き下す

南無阿彌陀佛諸共に  
 無残や花の誓さへ  
 之を菩提の種として  
 御なき體に言ひ遺し  
 八島の陣へと送りしは  
 心のうちぞ憐れなり  
 礎としもたうへつと  
 大和心の曇りなく  
 赤坂山にたてこもり  
 おろしの風にかたきらは

たまりもあへず散りくと  
 いやつきくに打寄せて  
 今を限り死なばやと  
 里にかはれる言の葉を  
 其身は頼で兵士を  
 底を深みて赤心に  
 消て戦の敗れとる  
 大和心は三吉野の  
 早くも仇の傳へ聞き  
 驚きなんとむらさみの  
 盡と心は撓みなく

散り行きにけりかの本の  
 又引返し攻來れば  
 心極めて櫻井の  
 子に教へつと遺し置き  
 打從へて湊川  
 謀りし事も泡となり  
 豫て斯ぞと空に満つ  
 花と散りにし憐れさを  
 暫しまどろむ夢をさへ  
 心をつきて君が爲め  
 家お傳へしみとらしの



梓の弓のなき數あり  
親子兄弟残らすも  
赤き心を今も世あり

楠正成 其二

建武の昔し正成は  
是は皇城守護の時  
之を汝お譲るなり  
世は尊氏の世となりて  
鏡おかけて見る如し  
父の子なれば流石も  
弓張月の影暗く

打浪されし郎等を  
吉の山奥深く  
流れも清死菊水の  
敵を千里に退けて

楠正行

鳴呼正成よ正成よ  
黒雲四方に塞りて  
悪魔は天下を横行し  
侮り果て上とせず  
絶ゆる間になら馬の音  
芳野れ山に花見んと

いるてふ事を記し置き  
國を枕になしてける  
傳へ聞くだも憐れなり

卅二

肌を守りを取り出し  
下し給し綸旨なり  
我れ兎に角お成るならば  
叡慮を惱し給はんは  
さは去り乍ら正行よ  
忠義の道はかねて知る  
家名を汚すこと勿れ

あはれみ扶助し隱家の  
月の桂や漣や  
旗を再び翻へし  
叡慮を安じ奉れ

公が逝去れこのかたは  
月日も爲に光りなく  
下を虐げ上をさへ  
吹き來る風はなまぐさく  
春は來れども花咲かず  
訪ひ來る人は絶てなく

卅三



君が御世こそ千代くと  
いづれれ時にあるなるや  
鳴呼大君れ御爲めに  
この世れ塵を拂はんと  
遠くゆなたを見わたせば  
雲れ上まで屹立し  
見ゆる菊水其旗は  
父れ賜ひしこの刀  
賊の頭を斬らん爲  
國れ仇なり父れあだ  
拂へは來る夏れはい

熟々思ひめぐらせば  
若しも病に冒されて  
不忠不孝と誹られん  
死出れなごりに今一度  
君が御影を伏し拜み  
聞て切なる胸れうち  
書き残したる梓弓  
誓ひし者は百餘人  
もれどもせず斬りまくり  
討死せしはいさぎよく  
都も遠き村里の

卅四  
嘯る鳥れ聲聞くは  
歎し死の至りなり  
振ひ起りて汚れたる  
する人どてはあらざるか  
金剛山は巍峨として  
繁る林の木れ間より  
實にこそ國の寶なり  
腹を斬れどれ爲ならず  
にくさもにくし彼れ賊等  
斬て捨ずりに置べきか  
頃は正平戊子れ春

元來よわき此からだ  
空しく失せし事あらば  
討死するは此時ぞ  
願かないて親面たり  
生て歸れれ詔り  
哀れといふも愚なり  
引きてかへらぬ赤心を  
雲霞の如き大軍を  
君の方をば枕して  
勇ましかりける次第なり  
女わらべに至るまで



忠臣孝子の龜鑑ぞと  
天地と共に傳わらん

◎ 兒島高德

我 國 守 武 士 の  
朝 日 に 匂 ふ 山 櫻  
左 近 の 花 に 風 吹 か ば  
梨 どり 直 して 守 る べ し  
其 色 其 香 た る なる も  
花 散 る 事 は な さ ぞ か し  
聖 帝 の 大 御 代 と  
櫻 花 こ そ 愛 た け れ

譽る 其名は香しく  
天地と共に傳わらん

大 和 心 を 人 間 の  
咲 や 霞 も 九 重 の  
守 れ や 守 れ 武 士 よ  
櫻 は 忠 義 の 花 なる ぞ  
浮 薄 の 風 に さ そ わ れ て  
千 春 萬 秋 動 か ざ る  
共 に 世 界 に 類 ひ な さ  
昔 し 兒 島 の 三 郎 は

夜 行 宮 ふ し の び 入 り  
赤 さ 心 を 黒 染 め の  
世 にも 稀 なる 忠 烈 は  
去 れ は 今 尙 武 士 が  
三 郎 如 さ 忠 臣 を  
帝 仇 する 者 ある か  
國 平 ら け け 安 ら け け  
廣 さ 世 界 輝 か し  
千 萬 春 を 迎 か へ ん と  
我 武 士 の 忠 烈 は  
◎ 大 關 秀 吉

十 字 の 詩 を も 作 り な し  
花 と 其 香 を 競 ひ ける  
鬼 神 と て も 泣 か ん め り  
花 見 る た び に 古 の  
羨 み 慕 ひ 慷 慨 し  
國 に 敵 する 者 あ ら ば  
聖 帝 御 威 徳 を  
櫻 の 花 と 諸 共 に  
矢 竹 の 心 け 彌 勝 る  
櫻 と 共 に 類 ひ な し



生れし國は山鳥の  
今に例し中村の  
阿彌彌助の一子にて  
唱へし頃の世の中は  
諸國に割據の英雄も  
藤吉の情ら思ふ様  
空しく過す時ならず  
我身を寄せて功名の  
偶松下嘉平治の  
我か思わくの伸ひざるを  
仕へし后ちは一心に

尾張の國の愛知郡  
鄙村に育ちし幼子は  
其名を木下藤吉と  
麻の亂れし如くにて  
興亡盛衰定めなし  
此亂世に生れ來て  
世に頼母敷英雄に  
端懸爲さんと思ひしが  
僕と爲りて仕へしも  
嘆ちて更らに信長に  
誠心推して餘念なく

忠義一途に身を固め  
兵の懸引圖を當り  
將を屠りて朝日さす  
後には羽柴秀吉と  
天正年間信長は  
次に毛利を攻むる時  
打ち任せつゝ親らは  
本意を遂げし心地にて  
光秀不意に襲ひ來て  
此報一回秀吉の  
逆賊無道の光秀は

運籌妙策奇計より  
攻めては敵の城を執り  
光りと共お歴昇りて  
名乗せし無雙の勇士なり  
猛き勝頼亡ぼして  
此重任を秀吉お  
西の都の本能寺  
安意しつゝ有つるが  
無残や信長弑せらる  
許に至るや引返し  
君の讐なり國の賊



打ち捨てず置くべきや  
八幡の山や洞が嶽  
陣に駆け入り無二無三  
瞬間中に攻め殺し  
或は降し又殺し  
姓豊臣賜りて  
兵馬の權は一握り  
北條氏政攻め降し  
争ふものも絶てなし  
勇氣餘りて馬躍り  
勢ひ外に溢れ來て

心は矢竹山崎や  
要所占て光秀の  
縦横薙立切まくり  
我に刃向ふ奴原は  
其績の高ければ  
身は關白の職につく  
命に服せぬ義久や  
六十餘州を徇へて  
織田氏に代り覇を唱へ  
之に從ふ武士の  
事朝鮮に及ばんと

文禄元年大軍を  
向ふ所に敵もなく  
彼より容るゝ其和睦  
爲せしも來る明國の  
兩び慶長元年に  
撃て摧きて日の本に  
支度半はに秀吉は  
黄泉れ客と爲りつれど  
名の幾千代の後までも  
◎大石良雄  
冬いつくも雪ふかく

起して進む釜山浦  
朝鮮八道蹂躪り  
心地よしとて凱旋を  
書翰に無禮耐へ難く  
兵を起して明國を  
威名を彼れに知らせんと  
空しく消ゆる水の泡  
異域に遺る豊臣の  
稱て、唱へて盡ざらん  
降り積りたる銀世界



吹く風寒き夜は路を  
吉良の屋敷に打向ひ  
てむかふ敵と戦ひて  
叫べる聲は雷ちで  
屍は山をなすども  
仇を打にし大丈夫が  
其名も高さ大石れ  
染し血汐に知れたり  
美名は世にも顯れて  
嗚呼忠臣よ内藏の助

◎僧月照

花の都も秋はなほ  
名は流れたる清水や  
秋の葉色の溝ごとに  
亂れゆく世の浪花江や  
猶世れ爲めに身をつくし  
波影岸の波ならぬ  
色は替らぬ青柳れ  
たの橋をば打ち渡り  
萬代かけて君が代の  
神に歩みを箱崎の  
筆の主をよく問へば

厭ふ事なき武士が  
思ひくりに打破り  
あたるを幸ひなきたをし  
閃く刀はいなびかり  
血汐は川と流れても  
四十七士の其中で  
赤き心は白雪を  
身は消ゆるともさへがた死  
譽れ馨し泉岳寺  
嗚呼忠臣よ内藏れ助

四十二

夕ふべ淋しき風情なり  
落來る籠の音羽山  
散るや紅葉のちりぐと  
蘆のさわりは繁くとも  
盡さんどても筑紫瀉  
操をいつか深みと里  
驛路を越て香推瀉  
千代れ松原千代かけて  
千とせれ松によそへつと  
社にかけし四つ文字れ  
延喜れ帝かしこくも

四十三



御手をば下しませりつゝ  
重ねぐれ白浪れ  
恨み浦半れ片だすき  
沾衣塚れ沾るるも  
やがて博多れ假住居  
又行く方は薩摩瀧  
心細くも都にて  
たよるは心筑紫瀧  
語ふ人も浮まくら  
せきとめふれて又舟に  
黒れ瀬戸てふ名もらうや

爰もむかしは石疊み  
よせし昔しを忘れじと  
かけて歎くも憐れなり  
吾身に着たる心地せり  
こゝも浪風さわがしく  
沖の小島にあらねども  
誰れか憐とおもふらん  
一人の外に打あけて  
波路へだてゝ野間れ關  
ゆられくへ行先は  
やがて鹿兒島かどの鳥

四十四

翼ちゞめて潜みしが  
日向をさして船出せし  
傾く月ともろとも  
身は大君の爲にとて  
いかなる縁しさこの世に  
底の藻屑となりぬるを  
かひの取も露ほども  
立さかげとも甲斐をなさ  
流よ外はなかりけり  
夫れ達人は大觀す

◎西郷隆盛

木枯かせに驚きて  
日は神無月もちの夜の  
照かゞやきて曇なき  
茲に一人の薩摩人  
契も深き船の沖  
乗合人も船びども  
さりとは知ぬ白浪の  
猶東雲の明がらす  
拔山蓋世の雄あるも

四十五



榮枯は夢か幻しか  
眞如の月の影清く  
何を怒るやいかり猪の  
勇みに勇むはやり雄の  
留りがたきを是非もなき  
若者原おむくいなん  
諸手の軍打破れ  
霜の紅葉のくれないの  
薩摩武雄のをたがひに  
霰たばしる如くにて  
木魂にひくときれ聲

大隅山の狩倉に  
無念無想を觀ずらん  
俄にげさする數千騎  
騎虎の勢ひ一徹お  
唯身一つを打捨て  
明治十年秋の末  
討ちつ討れつ頓て散る  
血沙に染めと顧りみぬ  
打散る玉は板屋うの  
面をむけん方どなき  
百の雷一ト時に

落るか如き有様を  
あな勇や人々や  
腕の力をためし見て  
いざ諸共に塵の世を  
唯一ト言を名残にて  
宗徒の輩もろどもに  
心の中ぞ勇まき  
昨は陸軍大將と  
類ひなかりし英雄も  
山下露と消はて  
無情を深く感じつ

隆盛打見てはぞ笑み  
亥れ年以來養ひし  
心に残る事もなし  
脱れ出んは此時と  
桐野村田を始とし  
煙と消へし大丈夫れ  
官軍此を望み見て  
君の寵遇世の譽れ  
今はあへなく岩崎の  
移れば替る世の中の  
無量の思ひ胸にみち



唯 悄然と整隊し  
折しもあれや吹き下す  
岩間にむすぶ谷水れ  
悲鳴するかと聞きなされ

◎花月の歌

月と花とは昔より  
たがよろこばぬ人やある  
心につれてうきこと  
足柄山の風すこく  
これより多く奥州へ  
死ぬか生るか白河の

目と目を見合す計りなり  
城山松の夕嵐し  
無常の色もなにとなく  
戌服の袖も濡すらん

誰が樂まぬ人やある  
さはさりながら月花も  
種となれるも多からん  
松の風そふ簫の音も  
いくさといへば身の末は  
關をば雲や隔つらん

勿來の關の春のくれ  
都の空は花ぐもり  
櫻の雪は將軍の  
戟の枕に夜は慣れて  
越路の山の月白く  
故郷の空にかへるぞと  
花れ都はあれはて  
今宵一夜れ宿頼む  
滅亡爰にきわまりて  
倭人ばふれ讒により  
二人ともなき賢臣は

駒をどいめて眺むれば  
鎧の袖に散かゝる  
鬢の霜より尙白し  
秋のあわれも知されど  
雲間を渡る鴈が音も  
思へば我もなつかし  
何處が我身れおきどころ  
櫻れ露に袖ぬれて  
平家れ末ぞ悲けれ  
諫めれ言容られず  
筑紫れ浦れわびずまひ



御衣を拜せし涙なる  
 我君今は賊れたため  
 無念れ心やるせなく  
 我が赤心申さん  
 月が光や花は香や  
 更にかわりはなきなるに  
 月を見て酔ひ花を見て  
 只一場の夢の間に  
 世のなり行ど無常なれ  
 上には君を煩はし  
 國の亂るゝその時は

五十  
 心れ底は如何ならん  
 遠き嶋ちに行玉ふ  
 十字をしるし櫻木れ  
 杯か多言を要すべき  
 幾萬年を経とて  
 常なきもれは世れ治亂  
 睡れるる春の手枕の  
 うつる興廢存亡の  
 若しも世運の拙なくて  
 下には民を苦勞させ  
 月の光はかゝやくも

花の色香は匂ふとも  
 されば世間の諸びとよ  
 國の光を東海の  
 國のほまれをみよしの、  
 するこそ今のつとめなり  
 樂しき月見をして見たや

などたのしみのあるべきぞ  
 今よりまごゝろ引起し  
 月よりも尙輝かし  
 花よりも尙芳ばしく  
 誓て斯もなせし後  
 樂しき花見をして見たや

訂増 軍歌集終



明治廿四年九月五日印刷

明治廿四年九月五日出版

發行者

岩

田

與

七

三重縣四日市町大字  
南町四十六番屋敷

印刷者

高

田

良

助

三重縣四日市町大字  
南町四十四番屋敷